

[原著論文]

日本語の自他動詞の誤用について — 中国人学習者の場合 —

丁 玲玲*

A Study of the Misuse of Transitive and Intransitive Verbs in Japanese —The Case of Chinese Learners—

Lingling DING*

Abstract

For Japanese learners, transitive verbs and intransitive verbs are learning difficulties. They often make a lot of mistakes, even if they have reached the upper intermediate level. This paper mainly explores the causes of misuse through analyzing problems with types of questionnaires, and making suggestion on how to use transitive verbs and intransitive verbs.

KEYWORDS : transitive verbs, intransitive verbs, misuse, Chinese learners

1. はじめに

日本語の「開く（自動詞）—開ける（他動詞）」、「出る（自動詞）—出す（他動詞）」などの対のある自他動詞、「感動する」、「食べる」などの無対自動詞、無対他動詞は日本語学習者にとって習得が難しい学習項目の一つとして、しばしば挙げられる。日本語教育においては、自他動詞は概して初級レベルで提示される項目であるが、中上級のレベルでも誤用が後を絶たない（小林1996, 市川1997）。例えば、次の誤用例はいずれも中国人中上級学習者の自他動詞に関する誤用である。

- (1) (発表の前に) それでは、始まります。
- (2) 良いアイデアがなかなか浮かべない。
- (3) 荷物は大きすぎて、かばんには入れられない。
- (4) この美しい物語に感動された。

上記のような誤用が生じた原因は一体どこにあるのか、そしてそれを防ぐにはどんな工夫が必要なのか、そういった問題点を明らかにするために、本稿では中国人日本語学習者47名を対象に、アンケート調査を行った。そこから得た結果をもとに、今後自他動詞の指導に当たって、留意すべき点を指摘しておきたいと思う。

2. 中国人学習者の自他動詞の習得状況

今回、九州共立大学に在籍している中国人留学生47名に協力してもらい、自他動詞に関する八つの質問に選択肢形式で答えてもらった。回答者は全員日本で、或いは中国で2年間以上日本語を勉強しており、中には日本語能力試験2級、1級に合格した者がいるなど、ほとんど中級又は上級レベルに達していると

* 上海師範大学天華学院日本語学部

* Shanghai Normal University Tianhua College Japanese Department

言ってよい。八つの質問は下記の通りである。

問 1, 来月「言語学」という雑誌に投稿した私の (A 論文が載る B 論文を載せる)。

問 2, 電気, なかなか (A つかない B つけない).
おっ, やっと (A ついた B つけた).

問 3, 田中: 昨日のパーティー, どうだった.
木村: すごい量の (A 料理が出た B 料理を出した) よ. あれだけの (A 料理が出る B 料理を出す) のは準備が大変だっただろうな.

問 4, この荷物は大きすぎて, 袋には (A 入らない B 入れられない).

問 5, 窓は壊れていて, (A 開かない B 開けられない).

問 6, この美しい物語に (A 感動した B 感動された).

問 7, 2 国間で貿易に関する条約が (A 調印した B 調印された C 調印させた).

問 8, 投資の失敗が会社を (A 倒産した B 倒産された C 倒産させた).

アンケート調査の結果, 次のような結果が得られた.

1) 対のある自他動詞

問 1, 来月「言語学」という雑誌に投稿した私の (A 論文が載る B 論文を載せる).

問 2, 電気, なかなか (A つかない B つけない).
おっ, やっと (A ついた B つけた).

問 3, 田中: 昨日のパーティー, どうだった.
木村: すごい量の (A 料理が出た B 料理を出した) よ. あれだけの (A 料理が出る B 料理を出す) のは準備が大変だっただろうな.

47人のうち, 問 1 では「論文を載せる」と他動詞を選んだのは25人, 不正確率は53%で, 半分を超えている. また, 問 2 では, 「つけない」「つけた」と他動詞を選んだのはそれぞれ27人と26人, 不正確率はいずれも半分を超えている. 正確率が50%を超えたのが問 3 であり, それぞれ26人, 32人が正解を選んだ.

2) 自動詞文と他動詞の可能文

問 4, この荷物は大きすぎて, かばんには (A 入らない B 入れられない).

問 5, 窓は壊れていて, (A 開かない B 開けられない).

問 4 では, 「入らない」と答えたのは19人で, 正確率は40%であった. また, 問 5 では「開かない」と答えたのはわずか7人で, 正確率は15%しかなかった. 今回出された八つの問題の中で, 正確率が一番低かった.

3) 無対自他動詞

問 6, この美しい物語に (A 感動した B 感動された).

問 7, 2 国間で貿易に関する条約が (A 調印した B 調印された).

問 8, 投資の失敗が会社を (A 倒産した B 倒産させた).

問 6 では, 「感動した」を選んだのは10人で, 正確率は21%であった. また, 問 7 では「調印された」と答えたのは30人で, 正確率は64%で, かなり高い正確率であった. 問 8 では, 「倒産させた」と答えたのは10人しかなく, 正確率は21%であった.

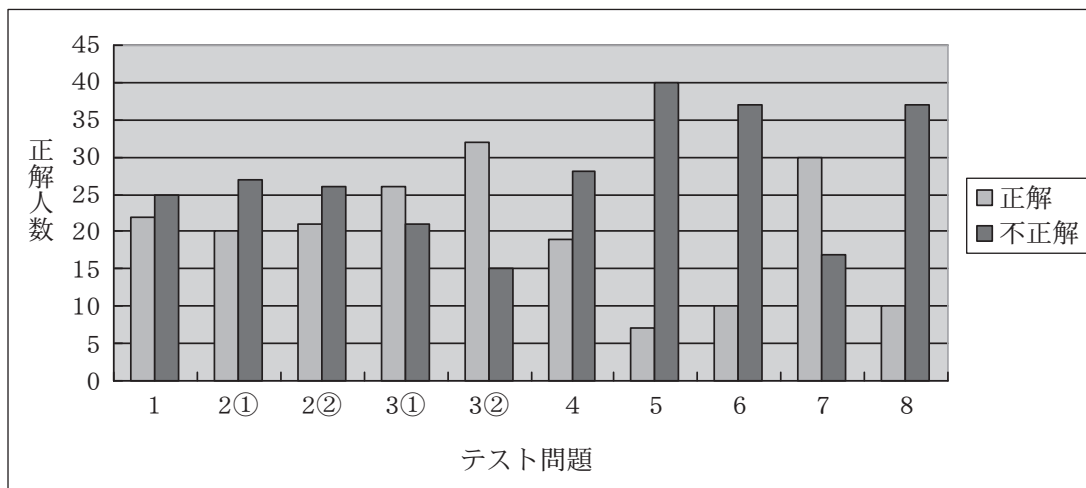


図 1 問題別正解率

3. 自他動詞の誤用分析

上記のグラフ（図1）を見て分かるように、日本語中上級学習者であっても、質問正解率が全般的に決して高いとは言えず、自動詞・他動詞の誤用がかなり目立っており、なかなか定着しにくい学習項目だと思われる。

張（2009）は中国語母語話者による日本語の自他動詞の習得に関する困難点について以下のように述べている。

- a. 中国語話者にとって困難なのは、日本語の自他動詞の様々な語彙的・形態的現れを学ぶことである。
- b. 母語の転移は形態レベルで起きることを考慮すれば、母語に使役接辞を持たない中国語話者にとって日本語の自他動詞の正しい形を学ぶのは一層困難であると考えられる。
- c. 中国語が複合動詞で他動詞を作るオプションを持つことから、日本語の他動詞の習得が自動詞に比べて困難である可能性がある。

まず、中国語にはそもそも日本語のように自他動詞の様々な語彙的・形態的現れがないため、中国人学習者にとって、「載る」「載せる」、「つく」「つける」、「出る」「出す」などの形の似た対のある自他動詞に関しては、どちらが自動詞か、どちらが他動詞かといった基本認識さえできていない。このような状況の中、自他動詞の正しい使い分けには程遠いと言わざるを得ない。実際、アンケート後、何人かの回答者にインタビューしたところ、どれが自動詞か、どれが他動詞か、分からないため適当に答えてしまったといった学習者の本音が聞けた。

次に、自動詞か他動詞かについて認識はできているにもかかわらず、誤用を生じてしまうという問題がある。問1、問2のように自動詞で表現するべきところに他動詞を使ってしまい、逆に他動詞をとるべきところに自動詞を使い、自他動詞の正しい使い分けができていない。これは学習者に最もよく見られる誤用であり、しかも最も習得しにくいところでもある。日本語教育現場では、教科書にせよ、教師にせよ、自動詞は「名詞＋ガ」、他動詞は「名詞＋ヲ」とそれぞれ伴う助詞と一緒に提示する傾向が見られるが、その結果、学習者は判断の根拠として助詞に拘りすぎて、自他動詞の根本的な違いを見落してしまう。すなわち、自動詞は「名詞B＋ガ」を、他動詞は「名詞A＋ガ＋名詞B＋ヲ」を伴うという事実が見過ごされてしまう。動作

主体が対象に働きかけるという、他動詞の肝心な意味が「名詞＋ガ」の形式もろとも学習者の頭から消えてしまい、自動詞を使うべきところでも何の気なしに他動詞を使うような誤用が生じてくる。

また、問4と問5のように、自動詞と他動詞の可能形の混用が見られる。中国人学習者は「荷物が入らない」「窓が開かない」といったような自動詞の否定文がなかなか作れず、そのかわりに「荷物が入れられない」「窓が開けられない」と他動詞の可能形をとる傾向がある。これも中国語母語干渉による誤用だと思われる。日本語では可能形の場合、「①能力と②状況のほかに、特性・体質、ものの状態、許可・規則」という五種類の用法があるが、「能力、特性・体質」を表す場合、文の主体（主語）は人や動物、つまり有性物でなければならない。「物の状態」は物を主語に立てることができるが、その場合その物事の属性を表す表現となる。たとえば「この魚は生でも食べられる」「この部屋は後ろのドアが開けられない」などである。つまり、時間の制限を受けず、ずっとその状態にあるという意味を表す。しかし、問4の「この荷物は大きすぎて、袋には入れられない」、問5の「窓は壊れていて、開けられない」は明らかに上述の「ものの状態」として用いられるものではない。したがって、ここでは他動詞の可能形ではなく、自動詞の否定の形を取るべきである。

もう一つ中国語母語干渉による誤用としては、問6「この美しい物語に感動された」といった無対自他動詞の場合、受身を使って非文を作ってしまう。問6では、恐らく「被美麗的故事感動了」という中国語による発想から出てきた誤用であろう。確かに、中国語では、受身の形でこの意味合いが表現されるが、日本語となると、必ずしも受身をとるわけではない。むしろ、この文では受身を用いるとかえって非文になってしまう。日本語では、「雨に降られた」「父に死なれた」など自動詞の受身はたいてい「被害」「迷惑」といったマイナスの意味合いが含まれており、「感動する」のような自動詞は受身形をとらないのであるが、これはまだ学習者に浸透していないようである。

4. 指導上の留意点

1) 日本語の動詞の形態と意味をしっかりとさえること

多くの教科書では、大きくスペースをさいて、自他動詞をペアで提示している。例えば、「落ちる－落とす」「沸く－沸かす」「出る－出す」「つく－つける」など。こうした一覧表は日本語の自他動詞には形態的に対応するものがあるという事実を分かりやすく示すものであるが、これによって学習者がこうしたペアを覚えることのみに目を向け、さらに、自他動詞とはペアを持つものだけを指すのだと誤解するとしたら、問題が出てくる。なぜなら、「食べる」「できる」のような対応する自動詞や他動詞のないものも少なくないからである。

また、自動詞は「名詞＋ガ」、他動詞は「名詞＋ヲ」というふうに提示して指導するのは一見簡単で覚えやすいようであるが、かえって誤用を招いてしまう。形態よりも、自他動詞それぞれの意味をしっかりとさえておかなければならない。他動詞は動作主体が対象に対し何らかの意志をもって働きかけることを意味する。その結果、対照の性質や状態などが変化することがある。一方、自動詞は主体の対象物への働きかけを表さない。例えば、「降る」「曇る」「咲く」など自然現象の自動詞の場合はこの点が明らかである。ただし、「行く」「歩く」「遊ぶ」などのように、主体の意志的な動作を表す自動詞もある。したがって、自他の基本的な違いは主体の意志の有無ではなく、働きかけの対象の有無だといえるだろう。

さらに、自他動詞の使い分けに関しては、他動詞文と自動詞文の違いは、「動作の主体に視点を置くか、物事、事柄に視点を置くか」にある。つまり、自動詞的表現はその物事、事態に注目するのに対して、他動詞的表現はその物事、事態を起こした人物（動作の主体）に焦点を当てる。例えば、目の前を歩いている人が財布を落とした場合、次の二通りの言い方が可能である。

a. もしもし、財布が落ちましたよ。

b. もしもし、財布を落としましたよ。

この場合、aは財布の持ち主の意志と関係なく、財布が落ちるという現象だけを捉えた自動詞表現、bは持ち主の意志は働いていないものの、財布を落としたのに気づかない持ち主の責任を指摘するような意味で、他動詞表現となっている。

2) 言葉に潜んでいる発想から自他動詞をとらえること

自他動詞は日本人のものの考え方、発想、さらに文化と強く結びついているように思えてならない。一つの例として「お茶が入った」と「お茶を入れた」である。家庭で多くの妻は夫に「あなた、お茶が入ったわよ」と自動詞表現を用いている。これは自然にお茶が入った感じであり、夫にしてみれば、「うん」と言えればいいのである。でももし「あなた、お茶を入れたわよ」と他動詞表現を使ったら、そうはいかない。「あなたの為に」の目的が強く感じられ、夫は「ありがとう」と言わなければ妻は怒るであろう。夫にさえ「ありがとう」を言わせない驚くべき配慮、いわゆる日本女性の奥ゆかしさを示す独特な表現なのである。

また、「今度結婚することになりました」も典型的な例である。中国人の発想では、「結婚」ということは愛し合っている二人の意志で決めたことだから、「結婚することにしました」という他動詞表現のほうがよほど自然な言い方なのに、なぜ「なる」という自動詞表現をとるのか、疑問に思う学習者が少なくない。一方、日本人の発想からみると、ある行為、動作は個人の意志で発生するが、もしある限界を越えたら、個人の意志作用を捨てて、自然発展した結果状態或いは社会団体の意志から表現する。結婚のように、「今度結婚することになりました」、これは「風が吹く」「雨が降る」「実をつける」などと同じように、まったく人間の成長で自然の結末だと思われる。したがって、普通、「今度結婚することになりました」のかわりに、「今度結婚することになりました」と言っている。あえて「結婚することになりました」と言ったら、その話し手は周囲の障害とか、家庭の反対を突き破って結婚しようと思決意したと思われる。このように、話し手の意志を無視し、捨てて、逆に客観的な変化の結果状態の立場から表現する例が多数である。

「三月いっぱいで閉店することになりました。」

「今度アメリカへ留学することになりました。」

「今日は3時に田中さんと会うことになっています。」

「山田課長は秋から海外出張することになるらしい。」

要するに、よく動作主の立場から物事を述べ、動作の行為者に視点を置く中国語に対して、日本語の場合は物事に視点を置く表現が好まれる。つまり他動詞表現よりも自動詞表現が好まれる。それは表現上の特徴

というよりは、むしろ発想の違いであると考えられる。したがって、自他動詞の習得を指導する際、単なる言葉そのものだけでなく、そこに潜んでいる更なる重要な情報、すなわち日本人の物の考え方、日本文化、中日両言語の発想の違いなどにも十分に配慮しながら指導すべきだと考える。

Received date 2012年12月26日

参考文献

- 1) 佐治圭三 (1992) 「外国人が間違いやすい日本語の表現の研究」 ひつじ書房
- 2) 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現」『文芸言語研究言語篇』29 筑波大学文芸言語学系
- 3) 市川保子 (1997) 「日本語誤用辞典」 凡人社
- 4) 青木直子 土岐哲 尾崎明人 (2001) 「日本語教育学を学ぶ人のために」 世界思想社
- 5) 中石ゆうこ (2003) 「対のある自動詞・他動詞の習得研究の動向と今後の課題」 広島大学大学院教育学研究科紀要 第52号
- 6) 新屋映子 姫野伴子 守屋三千代 (2004) 「日本語教科書の落とし穴」 アルク
- 7) 張麟声 (2009) 「日中両語の自・他動詞の対照研究」 第12 回中国語話者のための日本語教育研究会